



それをもとにフィクションとしての『生きてゐる兵隊』を書いた。この小説では従軍僧やインテリ兵などの个性的人物を配し、銃後とは著しく環境が異なる戦地で、これらの人々が自らの自我と戦争とのあいだにどのように折り合いを付けようとしたかが探求される。たとえば中国人女性に対する残虐行為を目にしたさいの精神の動揺、そしてそれをどのようにやりすごして罪悪感を隠蔽したかが描写されている。石川に反戦的な意図はなかったにもかかわらず、この作品は「皇軍兵士」の残虐さを描いたということで発禁となり、石川は有罪判決を受ける。

一方、火野は九州で徴集され中国にいたが、この出征中に出征前に書いた小説が芥川賞を受賞し、一躍話題の人となった。そしてその兵士としての経験をもとに『麦と兵隊』『土と兵隊』『花と兵隊』のいわゆる兵隊三部作を書いて、ベストセラー作家となった。これらの小説では、兵隊の内側からする日常が、戦地を舞台として細かく書き込まれており、行軍の苦しみ、銃弾をくぐる恐怖、中国人に対する見るに忍びない残虐行為などが描かれるが、それらは戦争を反省的に捉える方向には向かわず、本論文によれば戦場での「思考停止」へとつながっている。火野はありふれた市井の人々が戦場で鍛えられたくましい兵隊になっていくことに高い価値を見出しており、また石川の場合とは異なり、個が容易に全体性へと溶け込んでいく集団としての兵隊を受け入れているために、戦争を問題視する視点が失われたと解釈される。

いまではあまり知られていない作家である榊山は、当初は従軍経験を経ずに『戦場』という小説を書いた。この小説では当時流行したデカダンスやニヒリズムに染まった東京の大学卒者で予備役として招集された士官が主人公に設定されている。この主人公にとって生死の境に立つ戦場は生命の充実感を満たすものとして都市の頹廢からの逃避の場であり、本論文はこの小説にドイツのユンガーにも類似したモチーフを見出している。

第三部「戦場から還る」では、これまで研究されることの乏しかった戦時中での「帰還兵」の意識とふるまいとが、自らもまた帰還者であった戦争作家の作品を通して(榊山も後にビルマに徴用されている)取り上げられている。「帰還兵」は政府や軍にとって、銃後における戦意高揚のための格好の存在であったが、同時に戦争の内実を知るゆえに危険でもあった。帰還した作家たちも、戦地と銃後のギャップや自らに期待された社会的役割の不安定さに悩み、そのような帰還兵を描く小説やエッセイを発表している。たとえば帰還後の火野は、戦場にあつて兵隊はその衝撃により神経に異常を来たし、「頭の調子が狂ってしまった」おり、その結果粗野で傲岸なふるまいが行なわれたことを語る。そこには火野の、兵隊として人間として立派に生きる理想との隔たりがあり、また兵隊が帰ってきて国内が活気づいてほしい、という彼の願望に反して、戦場で夢見た故郷に居場所を見つけることのできない帰還者の孤独を小説で描くことになる。榊山もまた、傷痕軍人を主人公とする小説のなかで、傷痕軍人が観念的には尊敬されつつも、仕事や結婚において差別され、農村共同体のなかで見捨てられていく現実を描いている。

作家たちは戦争に協力する態度を崩していなかったにもかかわらず、戦争の負の側面が語られざるを得なかった点を、本論文は取り上げている。石川もまた、戦争末期になると自らの筋を曲げてまで戦争や兵士を美化することに耐えがたくなり、戦争に協力するためにこそ軍隊批判や政治批判をしないわけにはいかない、という地点に達したのだとされる。

終章では、「敗戦と復員」が論じられる。ここでは作家たちは自らも復員兵を迎える側になったが、火野の『悲しき兵隊』は、敗戦後の思想の変化や軍部への反感のために、復員兵が民衆の冷たい視線にさらされたことを悲しみ、戦後に同調して態度を変えた知識人に対して節操の欠如を問題にする。本論文はこうした作家の態度に一定の意義を見出しつつ、結局火野が、道徳の退廃を嘆くという戦時中からの社会への関わりを脱却することができず、自ら戦争に加担した責任を反省することができなかつたことを問題とする。政府や軍を加害者とし人民を被害者とみなす共産主義の立場によっては見えてこないものを、石川や火野は見出していたのだが、彼らからの戦争責任の追及に応えることができなかったのである。

本論文は日本の戦争経験の再検討という意味で、最近のポストコロニアリズムに刺激された文学や文化研究の領域での諸研究と関係し、これらの成果を十分に踏まえたうえでなされているが、これらとは一線を画する独自性を有する点に、画期的な意義を見出すことができる。すなわち、大衆的に受容された戦争文学のなかに、公式的な政治的立場では読み取ることのできない微妙な矛盾や逸脱を見出し、作家と民衆意識との相互作用のなかに戦争経験の多義性を十分に明らかにした点である。

また、戦場と銃後の空間的な隔たりをとらえ、それらを媒介するメディアとの関わりで戦争文学を位置付けるという点や、さらに戦争報道のあり方や PTSD の問題にも関わるなど、現代の戦争を論じるうえでも数多くの示唆を与える研究と成り得ている点が評価される。

もっとも本論文にも欠点が見出されないわけではない。作家や作品ごとに諸主題が複雑に分岐して十分に整理されていない点があり、やや冗漫な叙述も散見される。しかしこれらの点も、叙述の進行とともに主題が明らかにされていくこの論文のスタイルにおいてはやむを得ないものがあり、論文の高い価値を損なうものとはいえない。

以上の理由から、当審査委員会は、本論文が博士(学術)の学位を受けるにふさわしいものと判断する。